

主 な 記 事

| | | |
|--------------------|-------|----|
| * 編集後記 | | 20 |
| * NEWS | | 18 |
| * 禅文化賞授賞式 | | 14 |
| * 提言 坊さんよ変わろう | | 10 |
| * 松原泰道師 ご遷化によせて | | 9 |
| * 江南山梅林寺沿革 | | 1 |
| * 脚下照顧 東海大玄老師 | | 1 |



発行所
臨濟宗青年僧の会

発行 足立 宜了

編集 丸毛 俊宏・長谷川 實弘

事務局

〒424-0847 静岡市清水区大坪1-3-32

TEL 090-7698-3661

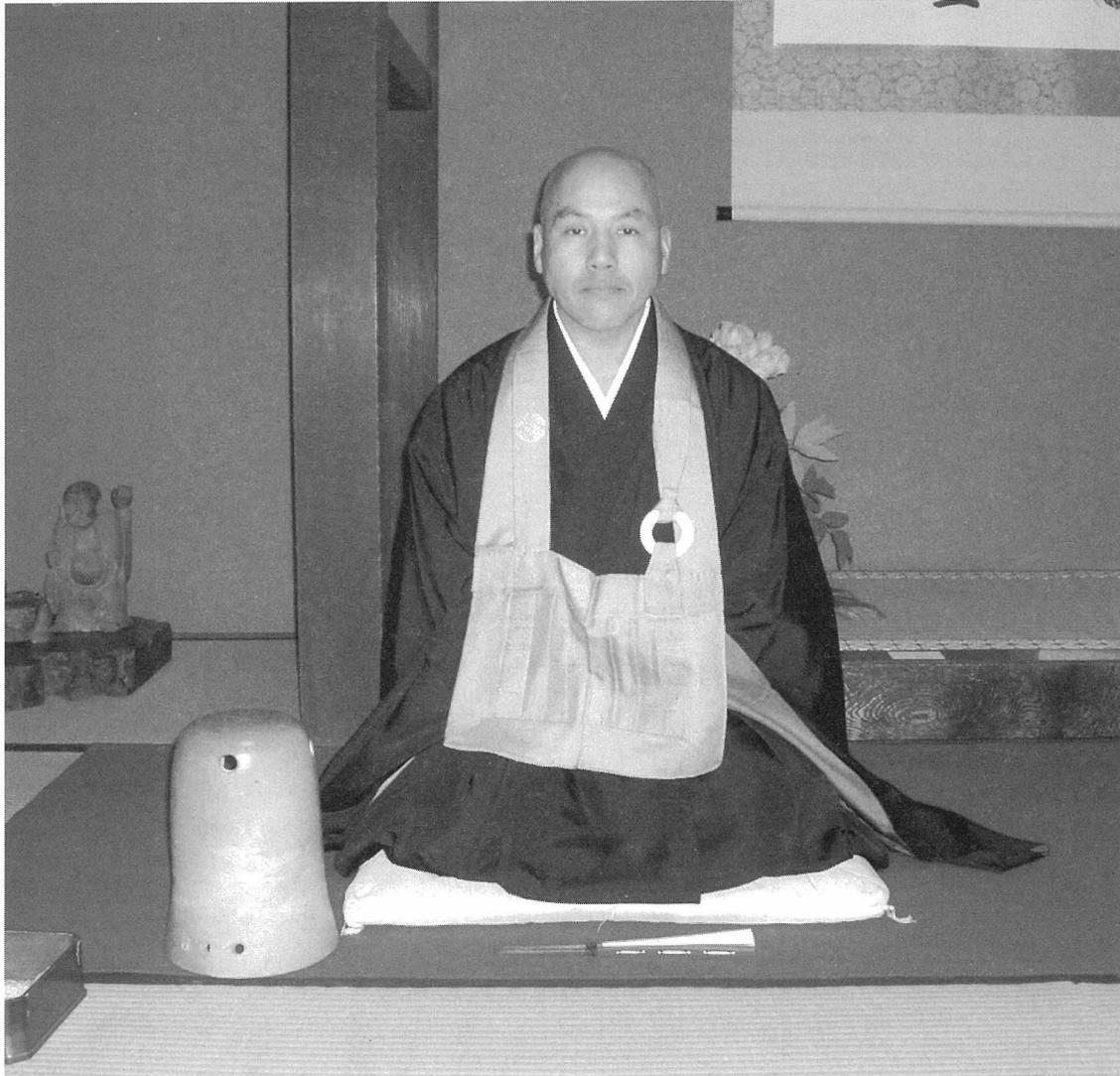
FAX 054-352-2187

〒振替

00810-8-123451

<http://www.rinsei.net>

rinsei99@aqua.ocn.ne.jp



脚
下
照
顧

梅林僧堂師家
悠江軒 東海大玄 老師

もちろん
和尚さんというのは
お酒も飲まない
煙草も吸わない
肉、魚は食べない
妻帯はしない
高校の時分から
そう思っていました
何も知らないで
出家をしたのです



梅林寺 山門

生い立ち

生まれは、大阪の阿倍野です。父親は化学会社の染料工場に勤めていました。

昔は子供が多かったから、私の父親も十人兄弟です。親戚の出入りが多くて、叔母さんやとばかり思っていたのが、実はいとこだったりして。父親が兄弟の一番下。

母親も六人の一番下。私も三人兄弟の末っ子です。いとこの子でも私より年が上です。小さい頃はそういう関係がわからなくて、叔母さんやと思っていたのが中学生頃になつたら、いとこだったのがわかつたりね。そうすると同じいところで、離婚したり、家が倒産したのもおる。夜逃げしたのもおる。小さいながらにそういう話を聞いたたりすると、人生というものは、世の中というものは、とやっぱり考えさせられる。中学時分というのは一番多感な頃で、いろいろ思い悩むことがありますからね。

私は、昭和二十八年生まれですから、団塊世代の後ですね。それでも中学校では生徒が二千人おりました。進学というのは大変だったですよ。家は裕福ではなかつたし。当時、『黒部の太陽』という、石原裕次郎の映画がありました。そして東京オリンピックが終わって、日本列島改造論で黒四ダムなどが施工されたときでしたから、男子一生の仕事はこれだと思えましたね。トンネルを掘ったりダムを造る。それで、府立工専の土木を受験したのです。『黒部の太陽』に憧れて。

競争率が十倍近くあつたのじゃないでしょう。先生からは「無理だ」と言われ

ました。それでも受けたのですけれども、ものの見事に滑りました。親は「公立しかやれない。私立になんかやれんから働け」と言う。それで方向転換をして、市立工芸高校の美術科へ入学しました。そこへ入つてみて、「はあ、いろんな人間がおるなあ。様々な家庭があるなあ」と、本当にそう感じました。

今まで自分が、親に対する不平不満、例えば、家が貧乏だとか思っていたのが、そういういろんな生徒との付き合いを体験して、世の中は広く、自分が知らないことがいっぱいあることを思い知らされたのです。だから、今までの自分が知らないことを経験したくなってみたんですね。今までの自分が否定されたような。それまでは自分では大人だと思っていたのに、これじゃダメだということでしたね。

出会い

そうこうしているうちに、担任の先生が、いろいろと考えて下さった。やっぱり先生というのは大事です。ああいう多感な中学、高校のときに、いかによい先生に巡り会えるかどうかは、非常に大事なことです。今、

私自身がこうして雪香室東海大光老師の後を嗣いでいますけれども、なるほど昔の修行僧が、師を求めて行脚をする。この師弟の出会いというのは、大切なものだと思います。そして師には重大な責任があると思います。私は学校でいろいろと問題を起こして困らせた生徒だったので、先生は本当に親身になって下さいました。

担任の先生が、もう遷化されましたけれども花園大学の学長もなされた大徳寺の立花大亀老師と、お茶のご縁があつて「実はこれこれ、こういう生徒がおります。困っておりますけれども、どうしたらいいでしょうか」と相談して下さいました。そうしたら大亀老師が一言のもとに「好きにさせてやったらいいじゃないか」と言われたらしいです。ただ、そうは言っても先生にすれば好きにさせるわけにはいきません。そのとき、綾部の和尚さんがたまたま老師のところにもえておつた。綾部の和尚さんは保育園の園長さんやら、生活保護司やらいろいろの町の役をしておられたんです。それで「そういうのがおるのなら一度綾部に連れて来んか」と先生に言われたわけで、私は綾部に連れていかれました。

初めはそうして先生と一緒に行きまし

が「夏休みは一人で来いよ」と言われて一人で綾部に行くようになりました。

その頃から、仏教というものに少しずつ傾倒していった。それはなぜかというところ、新聞社のカルチャーセンターだったか、山田無文老師が法話に来ておられた。それを聞きに行っていたんです。そのとき、雲水さんが二人ついて来られて、今でもその話を覚えておりますけれども、無文老師の前に宗教学者の梅原猛さんが話をされて、その後に無文老師が法話をされた。『法華経』の火宅の話をしていただきました。「火宅じゃなく、火宅じゃなく」と。

雲水さんの格好を見て、世の中にはいろんな人がおるもんだと思いました。そういう下地がありました。それでいろんなことを経験してみたくなつたのですね。まあ、これが高校一年生のときです。

出家

そうしていざ高校を卒業するときに、どうするかということになった。兄は優秀だったので教育大学へ行って、今は校長先生をしますけれども、こっちはダメです。しかし親は私が何も言わんから、浪人する

くらいに思っていたんでしようね。でも今までのご縁があつたもんですから、どうするかというときに、「エイ、ヤア」という感じで出家しました。それで綾部の和尚さんが「それなら美濃へ行け」と言うので、清泰寺に入門したんです。

清泰寺で一年ちよつと小僧生活をしていましたら、伊深から托鉢にみえるし、妙心僧堂からも遠鉢にみえる。雲水さんのああいふ姿に憧れたのですね。清泰寺では小僧でも、雲水の姿をしていました。一年ほどしたある日、弊師である高林太山和尚に「僧堂にやらして下さい」と言つたところ、怒られました。「『金剛経』も読めぬのに僧堂へ行つてどうするか」と言われました。それから『金剛経』の特訓です。朝、粥座が終わつて、茶礼が終わつたら隠寮へ行つて、昔ながらのやり方で火箸を使って「一時佛在」と特訓を受けました。そのときに弊師が「お前は高校しか出ておらんけれども、大学は行かんでもいいか」と言われ





梅林寺 勅使門

ました。しかも高校も普通科ではありませんでしたし、まともには行っていないなかつたのですから心配されたのでしょう。しかしその頃、無文老師の法話を聞いて、「禅というものは、頭じゃない」と思っておりましたからね。学者の梅原さんも「禅は頭じゃない、学問じゃない、実践だ」と言われた。そういう言葉が頭に残っていたから「いや、学校はいいです」と断ってしまったんです。

梅林僧堂へ

さて、何処の僧堂に掛搭するかと考えたときに、当時、清泰寺の次の新命さんになる人が妙心僧堂におられました。それから私の兄弟子が伊深におられた。更には、今度、伊深の短大に入るといふ兄弟子がおりました。弊師は平林寺。それから三島の龍沢寺の鈴木宗忠老師も弊師の弟子です。近辺にそういう兄弟子がおられました。それで一番遠いところ、梅林僧堂だと思いました。

それに九州というところは行ったことがなかつたのです。沖縄はまだ外国だったし、三十六、七年前のあの頃は、宮崎は新婚旅行にみなさん行かれていて、暖かいところ。九州の人には大変失礼だけれども、宮崎も福岡も沖縄も、みな暖かいところで外国のイメージだった。そうして久留米といつても、久留米餅しか知りませんでした。美濃では紙漉で、一集落がみな紙すきのところがあります。そのイメージがありましたから、久留米へ行くときみな餅の機織りをしていて、気候が暖かくのんびりしているよ

そこで、昭和四十八年に梅林僧堂に掛搭しました。四十九年に雪香室老師の晋山式がありましたから、一年間は青嶂軒東海玄照老師の教えを受け、その後は雪香室老師の教えを受けました。

花園大学へ

まだ新到や旧新到のうちにはよかつたのですが、三年半いても、やっぱり語録なんか全然読めませんし、語も引くことなどさっぱりでしたから、やはり勉強はしなければと思いました。恐る恐る弊師に「大学へ行かしてもらいたい」と言いました。これまで青春時代というものがなかつたので、一般の学生さんたちのように四年間、下宿ができると思っていましたら、豈に測らんや東海庵にお世話になることになった。

大井際断老師が大分の萬壽寺から移られて一年目か二年目だったでしょうか。昭和五十二年です。東海庵で二年間大変お世話になって、あと二年間は綾部のお寺から通いました。

学生の間も、お盆、彼岸、年末年始の諸行事、又、法要等で美濃へ帰っていましたから、大学での、クラブ活動したりとか、

ゼミ旅行とか、そういうのは経験ありません。

出会いという不思議さ

ときどき思うのですが、もしお坊さんになつていなかったら、あのまま絵の道に進んでいたかもしれません。

「そういえば実家の母親に「出家します。お坊さんになります」と言つて清泰寺で兄弟子と得度式をしたとき、母親が言つたことは、「お前は和尚さんになる因縁があつたのだ」ということでした。実家は分家でしたから、神棚がありましたけれども仏壇はありませんでした。でも、「お前が生まれたのは地藏盆のときだ」と言われました。町内の盆踊りがあるときです。そのときに産氣付いて生まれたと言うのです。だから「あながち仏さんにご縁がないわけはない」と言われました。

本家へ連れて行かれ、命日のお参りをしたときに、仏壇でチンチン叩くと、祖母が孫の可愛さゆえにお菓子をくれたそうです。そのお菓子が欲しくて「お前はいつもついて行くと、チンチンとやっていたものだ」と言われました。自分自身の考えでこ

の道を選んだと思つていましたが、そうじゃないんだ、ご先祖さまからのご縁というものがあるのだなと思いました。

正直こそ取り柄

高校の担任の先生がとてもよい先生だった。私が父親の愚痴を言う。尋常小学校しか出ておらんから、学問もない。会社勤めといつても染料を扱う現場労働者でしたから、会社での地位もない。そういうことを子供心に不満に感じていたんですね。今か



梅林寺 本堂前

ら思えば、誠に申し訳ないことですが、それを言ってみたら「人間はそういうことじゃないやろ。正直しか取り柄がないことは、人として一番じゃないか」と担任の先生は言われた。更に「職業云々じゃない。また部長やら社長やら、いろんな人がいるけれども、そもそも人としてどう生きていくか、それが一番だ。だからこそ、正直しか取り柄がないというのは一番よいことだ」と、そう担任の先生に言われた。

皆さんは、職業としての和尚さん、住職という立場がありましようけれども、そういうことは別にして、やはり一番は、人として、人間としての生き方の問題でしょ。何が大切か、これを突き詰めていくと、自ずから僧侶・出家というものの根本、源、土台にもなるのじゃないかと私は思います。途中から出家した人も、お寺の子供さんで生まれ育ってきた人も同じですよ。お釈迦さんの人としての教えは同じですから。何の変わりもありません。僧堂に行かれて、住職になられて、檀信徒の皆さんに接するうちに自ずと「ああこれじゃいかん。こういうことか」というふうには、皆さん方それぞれに勉強されて、変わっていかれるんじゃないかと思えますね。

お礼の儀式

普通、一般のお寺での葬式、法事、仏事は大切な柱です。また、生活面での収入の柱でもありますね。これをどうして教えていくか、日々導くという用語弊があるかもしれないが、このことをしつかり考えていかなないと、檀家さんはだんだんお寺から離れていきますね。

今、妙心寺の管長さんである雪香室老師は「葬儀というものは、亡くなった人に代わって遺族がお世話になった皆さん方へのお礼をする儀式だ」というふうにおっしゃったのです。「亡くなった人はお礼ができないので、遺族がそれに代わってお礼の意味合いの儀式をするのだ」というふうに言われました。だから「わしが死んだら葬式を出さんでいい」、「無宗教でいい」、「人に迷惑をかけない」、そう言われる人たちがおられますけれども、いかにも進んだような、文化的な、また故人を尊重したような印象があるように聞こえますが、しかしこれは亡くなった人の傲慢ですね。亡くなった人は、決して自分一人で生きてこられたわけではないのです。また、死んでしまっ



梅林寺 庫裡

ているから自分で後始末もできないのです。何よりもたくさんの方々に世話になって自分の一生を終えることができたわけですから、遺族が代わって皆様方にお世話になったお礼をするということなのです。

三本の柱

葬式・法事といった所謂仏事とは別に、禅宗の僧侶にとつて何が大事かと言えば、基本は坐禅ですよ。去年、梅林寺の開山和尚の四百年遠諱がありまして、これ

を記念して梅林寺展を石橋美術館で開催しました。そのときに美術館の方から、「せつかく皆さん方が来られるのならば、坐禅の体験コーナーを設けて入館する人たちに坐禅の体験をさせる。それを雲水さんが指導してくれませんか」という話がありました。これを受けて行いましたところ、非常に多くの人たちが坐禅体験をされた。

この後、久留米市が観光客を呼び込もうということ、いろいろなイベントを企画しましたが、ここでも坐禅体験の企画がありました。全部で二十も三十もいろいろなイベントがあった中で、坐禅体験が一番に満員になった。でも、初めこの話があったときに「十月、十一月の行楽シーズンに、誰がわざわざお寺に来て坐禅をするのか」という話だったので、しかし老若男女、特に子供さんが多く来られました。「梅林寺というお寺さんは知っていましたか、やっぱり入りにくかった」という声を聞きました。それに「坐禅をしてみたい。けれどもどうしたらいいか、どこへ行ったらいいかわからない」というような話も聞きました。全国に妙心寺派だけでも約三千四百ヶ寺、臨済宗のお寺だけでも全国に約七千ヶ寺くらいある。この七千のお寺がそうやって坐



梅林寺 庫裡廊下

禅をしたいといつて来られた人を受け入れればよいのだけれども、現状はどうですかね。坐禅をしたいという人がわざわざ来るのに、「うちではできません」と。やはり受け入れていくような体制を作らなければいけない。たとえば、朝八時から坐禅をする。毎日ができるのなら、毎週日曜日にするとか。自分のお寺で坐禅をすることです。そうすれば自然と、あのお寺では毎週日曜日のいつに行けば坐禅ができるということが知られるようになる。まずは受け入れです。次は初心者に「足はこう組むですよ」、「呼吸はこうですよ」、「数息観はこうですよ」と指導できなければいけない。勝手にやらせておくわけにはいかない。そうなるのと和尚さんがきちつと数息観を体得しておかなければならない。「あそこのお寺さん

へ行けば坐禅ができる」、「坐禅させてもらおう」と言われるようなお寺にせにゃいかんと思います。そのための七ヶ寺ではないでしょうか。僧堂へ行った人は坐禅の浦口ですからできるはずですよ。何はともあれ、これだけはやらなければ。

たとえば、お葬式があると、必ず七日七日がありますね。それから初盆、一周忌がある。三回忌がある。そういうお勤めの後、たとえ十分でもよいから坐禅をさせるのです。この頃、私はそうしています。お勤めが終わって、皆さん方も多分法話はされると思います。その後、たとえば五分でも十分でも、やらせてみましょう。本当は足を組むわけですが、坐り方は正座でもよいでしょう。「はい、息を吐いて、吸って」というふうに呼吸法を教えて「一日一度は静かに坐って、体と呼吸を調えましょう」と。このように坐禅をさせる方法はいろいろとあると思う。とにかく坐禅をすることです。実践ですね。

僧堂のときの、坐禅、お経、作務、やっぱりこれが三本柱ですよ。基本ですね。どうですか、一ヶ寺のご住職になられたからといって、これが変わるわけではないでしょう。



韋駄天

梅林寺でも檀家さんが三百軒ちよつとありますが、所謂、本山僧堂のように僧堂だけではなく檀務もあります。皆さんと同じように、一ヶ寺の住職としての仕事もあります。これだけの伽藍の維持管理もしていかなければなりませんね。しかし私自身は雲水で来たときのことをそのまましているだけです。何かといったら坐禅、お経、作務でしょ。結局そこへ帰っていくのじゃないですか。

そう言いますと「この頃、世の中が大変な中でも、老師さんは暢気がいいですね」



梅林寺 外苑

なんて言われますから、「どう大変なの」と聞くと「これこれ、こうだ」と言うから、「勝手にみんな大変がつているだけじゃないか」と答えるのです。「世の中のことを知らぬ」と言って怒られますけど、先ずは基本的にすべきことをしていけばいいんじゃないんですか。みんなが、あまりにも振りまわされてしまっているんですよ。社会の仕組み、経済の仕組みについていけない経済一辺倒になり過ぎだと思うのです。今回

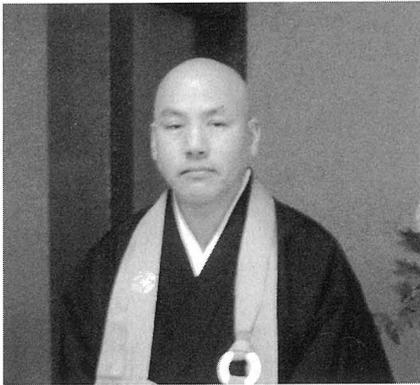
の不況は、みんなが少し考え直すのに丁度よい機会じゃないですか。お金は命の次に大事かも知れないが、しかし経済だけでみんなが生きているわけではないからね。だから禅宗の僧侶は、坐禅、お経、作務ですよ。

触れ合い

昔の禅僧のように、黙っておればいいんだというふうにはいきませんでしょう。特に若い人たちにはわかるように話をしなければいけない。そこに工夫というものがあるんでしょね。ただ、直に目の前でお話をする、直に挨拶をする。そういう触れ合いというものをもっと大事にしませんと、

この世の中がおかしいものになっていってしまう。いや、もはやおかしくなつてしまっている。

結局、何でもそうでしょうが、右から左に、こうだ、こうだというものはないのだと思います。やるべきことをやっていくこと。それしかできないですしね。それはなぜだろうか、どうしてだろうか、は考えたことはありません。要するにお釈迦さんがやってきたことを我々もやればいいんです。お釈迦さんが話されたことをその通りに話せばよい。お釈迦さんが悟られたことをその通りに悟ればよい。これは難しい。でも、常にお釈迦さんに顧るということですよ。結局これは『脚下照顧』です。このことさえきちつと踏まえておけばいいのです。



東海大玄老師 プロフィール

昭和二十八年 大阪市に生まれる
 昭和四十八年 高校卒業後、美濃清泰寺にて出家・得度
 昭和五十六年 梅林寺僧堂 掛搭
 平成十四年 京都 花園大学仏教学科 卒業
 梅林寺住職並びに僧堂師家就任

江南山 梅林寺 沿革



梅林寺 開山堂

筑後川の清流に臨む風光明媚な臨済宗妙心寺派の古刹として、また、九州における代表的な修行道場として知られる梅林寺は、元和七年（一六二一）に有馬豊氏が丹波福知山（現在の京都府福知山市）から久留米の地に藩主として移封された際、故地の瑞巖寺を移し有馬家の菩提寺として建立した

ことにより始まります。

当初は大龍寺と称しましたが、後に寺号を豊氏の父である有馬則頼の法号「梅林寺殿」に因み梅林寺と改めました。境内の裏手には歴代藩主の霊廟や墓塔が静かに立ち並んでいます。

梅林寺の創建は湘山玄澄禅師によります。玄澄は師である禹門玄級禅師（慧性靈通禅師：慶長十一年（一六〇六）九月二十七日遷化）を勧請し開山にしています。九世憲幢威烈禅師の時代である文化元年（一八〇四）、六月には僧堂が開山し、それ以来雲霞の如く雲納が参集し、一大修行道場として多くの逸材を世に輩出してきました。

ところが明治の時代になると廃藩置県、廃仏毀釈の影響を強く受けて、一時荒廃します。すぐさま三生軒東海猷禅老師（十代妙心寺派管長）は復興にご尽力なされ、現在見られる壮麗な伽藍を整備されました。法は代々受け嗣がれ、梅林寺の先住職である雪香室東海大光老師は妙心寺派の管長として、現在ご活躍なされております。

場所は、JR久留米駅から徒歩で約五分程。国指定の重要文化財として有名な「絹本着色釈迦三尊像」一幅の他、尾形光琳の「富士山図」、長谷川等伯の屏風、加納雨蓬

らが描く襖絵など六百余点の貴重な寺宝が収蔵されています。

また、梅の名所として知られる外苑は開山三百五十年遠諱の記念事業として、隣接するブリジストン工場の創業者である故・石橋正二郎氏の援助によって約三千㎡の墓地を改葬して、跡地に玉剣・紅ちどりなどの約三十種、五百本余の梅樹が植えられて整備され、昭和三十三年春から市民の憩いの場として一般開放されています。その美しさを一目見ようと毎年一月下旬～三月初旬のシーズンには大勢の観光客が訪れます。皆さんも是非一度、お出かけになってはいかがでしょうか。

香も高し 梅の林の 観世音
導きたまえ みだの浄土へ

梅林寺のご詠歌 永安七年（一七七八）頃

